
beat

洗井 あい

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

beat

【Nコード】

N2390A

【作者名】

洗井 あい

【あらすじ】

オレは新しく再生された肉体を、恨めしく見下ろした。またオレを玩弄するのか？オレは天に向かってツバを吐く。この借りをどうやって払ってもらおうかと考えながら。

beat 1

仲良く並んだ双子の乳白色の月が西の空低く浮かび、

眼を刺すような激しい閃光を放ちながら、東の空からは大きな太陽が昇っていた。

夜と夜明けの狭間、動物すら寄り付かない乾き荒れたサンドエリアでボンヤリと空を見上げ考え事をしているのは、彼が試作品を組み見上げた直後か、

途中で自分の論理ミスに気が付いて落ち込んでいたのか・・・そのどちらかだ。

彼の傍らに寄り添うように浮かぶ白い光りを放つ球体が、規則正しく点滅しながらシーシーっと発している音だけが唯一。

風も無く、あと1時間もすればジリジリと全てを焼き尽くすそんな場所で、

彼は真夜中にやって来てソコに寝転がり、ずっとそうして空を見ていた。

「Dr・ツインズムーンより何か来ます」

シーシーと音を発していた白い球体が不規則に点滅したかと思うと、ヒトの言葉をその中から発して、そこ寝ている男をDr・と呼んだ。一瞬、間を置いてゆっくり起き上がった男の疲れた顔を、容赦なく鋭い朝日が射る。

どうやら、論理ミスに気が付いて自分の馬鹿さ加減を嘆いていたらしい。

「何かってなんだ、メイ」

不快そうに顔を歪めると、素早く彼の尻の下に敷いていた防塵マントを頭からすっぽり被った。

「所属不明の小型船舶から、緊急脱出用ジェルポットが1つ放出されたようです。」

それを追って警備艇が3機追走しています。あと3分後、ちょうどこの場所にて着陸予定です。175・174・173・・・」

白い球体メイの無慈悲な警告に男は慌てふためいて立ち上がると、身を隠せる安全な場所を探して辺りを急いで見回す。

が・・・

この砂丘のサンドエリアに役立ちそうな場所、岩どころか石ころ一つ見当たらない。

「くそっ・・・来い、メイ！」

「121・120・ハイ、Dr・117・116・・・」

砂に埋もれる足を不慣れな様子で持ち上げながら、必死でバイクに飛び乗ってはみたものの、

普段から言うことをきいてくれないソイツが、こんなところでこともあろうか、またヘソを曲げた。

誰に似たのか、組み上げたメイすら手を焼くこともある。

「メイ、かからないぞ」

「62・61・右側部を・・・蹴って！55・54・・・」

言われた場所を力任せに一蹴りすると、グーウンと鈍い電子音が唸り始め、

車体がスッと宙に浮く。やれやれ、一回バラさないとダメだな。

「ヨシ」と彼は頷くと、マントのフトコロに球体を抱えこみアクセスを回す。

「44・43・42・・・」

懐の不気味なカウントダウンにウンザリしながら、後方の上空に姿を現した、光を乱反射させて落ちてくる緊急脱出用

ジェルポットを見上げた。

追撃する勢いで追走してきた3機の警備艇の銃口が、朝日にキラリと光る。

「ヤバイ」そう思った矢先、まるで旧式のマシンガンのような連射音が乾いた大地に響き渡り始め、

自分たちからそう遠くない場所で砂煙が空高く舞い上がった。

「なんてことを・・・」

『いかなる場合も脱出ポットを攻撃してはならない』

連邦共和国周辺には、そんな絶対的な決まりがあつたのではないか？
不条理な攻撃に、彼は嫌悪感すら覚えていた。

ポット内の乗員が武装していたとしても、

あのタイプのジェルポットでは敵に向かつて攻撃出来る筈も無い。

いや、無事着陸したとしても、外からの救出が無い限り外界へ脱出はままならない筈。

あの3機の警備艇の卑怯な攻撃の理由はなんだ？

バイクが巻き上げる砂煙に気付いて、攻撃が止むという希望は捨てよう。

兎に角、この場所から出来る限り離れなければ。

beat 2

「あれは違法行為です。

どのような状況下であっても脱出ポットを銃撃する事は許されません。21・20・19。」

球体を点滅させ、メイは低くうなるように言う。

「わかつてる！」

ジェルポットの下敷きにならないように、もっと離れないと・・・飛び散ったジェルの巻き添えもゴメンこうむりたい。

あと10メートル、身を低く縮め加速を願う。

銃声と共にブシャンと水風船が破裂するような、

イヤな響きを持った鈍い破裂音が後頭部に襲い掛かる。

「つう」ピリピリと刺すような熱い痛みが、微かに露出していた皮膚に走る。

「Dr、溶解液で洗浄すれば問題ありません」

「ああ」

防塵マントとバイクの尻にベッタリと張り付いたジェルの飛沫に苦笑しながら振り返ると、

後方で白煙をあげている脱出ポットのあまりにも無残な姿を発見し眉をひそめた。

警備艇は撃墜した脱出ポットに更に銃口を向け連射すると、まるで何事も無かったかのように太陽へ向かって飛んでいった。

「ありえないな」

「あの警備艇は違法行為を犯しました、報告する義務があります」マントの下から顔を出して宙に漂いながら、メイは赤く警戒色を発

光しキツイ口調で言った。違法行為を軽蔑するかのような口ぶりは、時間を経て学習から習得した技だ。

「何処の船だ？」

Dr. は、メイのそんな反応を面白そうに観察し、警備艇が飛び去った方角を見つめた。

あの方角の先には、確か・・・

「第3特別区所属の警備艇です」

「そうか・・・」

思ったとおり、第3特別区が絡んでるか。

よっぽど運の悪いヤツが、ポットに乗ってるという事になる。

軍も動かしてしまう程の力を持つその特区の存在を、知らない者はいない筈。

なのに、この男は・・・と、無残、いや悲惨に飛び散ったジェルポットの中央に横たわる

黒く焦げた死体・・・死体といってもその四肢は見当たらず、僅かばかりに形を留めた胴体と

頭部。

「Dr.、報告は？」

「面倒だ、ほっとけ・・・」

「はい」

靴底にへばりついたジェルを恨めしく思いながら、

彼がその場を立ち去ろうとした時、彼の耳に微かに聞こえた。

「Dr.、どうかしましたか？」

「今、何か」

彼は黒い亡骸を凝視する、彼の耳に聞こえたものはソコから発せられている。

微かに、耳が良い彼でなければ気が付かないほどの、微かな・・・

「オイ、生きてるのか！」

『・ア・・パ・・』

真っ黒な塊の中にあつた白い目玉が、ギリギリと音を立てて小刻みに動いている。

頭の中に詰め込まれていたドロリとした赤い保存液が、メタルの継ぎ目から染み出ていた。

「コイツは・・・」か

「JJ、ジャンピングジャックですか？」

「ああ」

ということとは・・・脳みそはまだ死んでないってことが。

このままにしておけば、いずれ保存液が無くなって本当に死んでしまっただろう。

コイツをちよつと助けて見るのも面白いかもしれない・・・いつものお節介癖が顔を出す。

彼はバイクからソードを持つてくると、不気味に動き続ける白い目の玉に向かって言った。

「オイ、神経が生きてたら痛いが、死ぬ事は無い」
躊躇うことなくレーザーソードを一振りする。

この世のものとは思えない、断末魔の悲鳴が乾いた空気を振動させた。

ゴロリと砂の上におちた頭部を袋に入れて担ぐと、彼はメイを伴って家路に着いた。

b e a t 3

さほど広くない暗い部屋の中央に、横たわるように置かれた2メートルほどの円柱。

まるで、ガラスの棺のように見えるその装置の中には、ドロリとした緑色半透明の液体が詰まっていた。

しかしまだ、その液体の中には何も入れられてはいない。

液体の状態が落ち着き、PHが安定するまで、その装置の中で循環しているだけだった。

操作基盤すら見当たらず、全ての制御はメイに託されている。

その棺を取り囲むように、カチカチと音を立てながらいくつかの装置が稼動していた。

先日、サンドエリアより持ち帰った頭部は、早速その日のうちに顔の骨格を形作っていた硬いメタル合成樹脂が外された。

瀕死状態だった脳は、蘇生装置の薬剤の混ざった乳色の保存液に漬けられ、規則的にその中に排出される気泡に揺れている。

その状態を自分の目で確かめようと、男は透明の容器にへばりつき眼を細めては見たけれど、保存液が邪魔でその脳幹の一端すらも見つけられずにいた。

「Dr、モニターに出しましょうか？」

「そうしてくれ」

壁一面に備え付けられた巨大なモニターに、中に浸かっている脳の3D画像が再生された。

脳幹部部分は無傷であったが、側頭葉の破壊が深刻で再生した後の障害が懸念されていた。

「どんな感じだ？」

「やってみないことには・・・」

メイのあまりにも人間染みた弱気な発言に、彼は噴出しそうになる。

それに気を悪くしたのか、メイはブツブツと文句まで言い出したのだ。

「あのまま放置すれば良かったんです、これほど破損がひどいと私にも予測が付きません」

「ずいぶんと無慈悲な事を言うじゃないか」

「計算不可能な事態が起こりうるということです」

「メイでも計算できないことがあるのか？」

球体は天井近くまで高く持ち上がって、不快そうに点滅を繰り返しながら

彼の頭上を忙しげに旋廻し始めた。

「冗談だよ、お前の言いたい事はわかる」

「完全に再生するまで処理します」

「ああ、頼む。お前にしか出来ないからね」

スーッと目線まで降りてきた球体を彼は両手に乗せ、部屋の大部分を占めているメイの本体へ繋ぐ。

球体の発光は止み、メイは脳の再生処理をスタートさせた。

脳の完全な再生だけで、どのくらいの時間が掛かるだろう・・・

目に見える傷は1週間もあれば完璧に癒すことが出来るが、

壊れた細胞、更にはDNAの再配列ともなるといささか見当もつかない。

コレほどまでにダメージの大きな再生自体、彼にもメイにも度々あることではないからだ。

まずは、遺伝子のコピーを始めないといけない。それに、その破損のピックアップも。

「メイ、コピー終了時間は？」

「3時間後です」

「かかるな・・・次の処理に入る前に必ず声を掛けてくれ」

「わかりました」

彼はもう一度モニターを睨むように眺めると、傍らにあったいくつかのファイルを手にとって部屋を後にした。

そのままラナイに出て、乾燥しきった空気を肺に吸い込み一気に吐き出す。

そうすると手に持っている昨夜のデータファイルが無意味なものに思え始め、自分自身に失笑しつつ、それをテーブルへ投げ捨てた。伸びた無精ひげを擦りながら埃っぽい長いすに横になり、軽い睡魔に眼を閉じる。

長いことこんな生活を繰り返してきたから、すっかり現在の文明社会から取り残されている。

彼の元へ好んで訪れる客は、ごく限られた人間。

昔馴染みの限られた友人・・・それから、必要に迫れた者だけ。

極端に人との交わりを絶ってきた割に、困った人間がいると手を貸さずにはいられない。

彼が独自に開発した特異人工知能AIを持つメイが、あれほどまでに人間染みてしまったのもきつと彼の人恋しさからなのだ。

「少し眠ろう」

誰に言うわけでもなく呟くと、腹の上に手を重ね、彼は束の間の休息についた。

beat 4

バタバタと騒々しい音がして、彼は目を覚ました。

音のする方を見やると、例のジェルポットの飛沫でやられた防塵マントが

強風に煽られ、バイクのシートに張り付いたまま音を立てて風になびいていた。

溶解液で洗浄する間もなくそのままに捨て置いていたそれらは、

カッチリと固まったジェルにまみれたまま、それはそれは無残な姿。

「はあ」と、新たに増えた仕事に彼はため息をつく。

「メイ、まだか？」

『あと30分程です』

外耳道に貼ってあるスピーカーから直接聞こえるメイの声に、身震いする。

それは5ミリ四方の至極薄いシート状のものだったが、

音声が流れるたびに微かに振動して鼓膜がムズムズと痒くなるのだ。

指で耳殻を撫でながら身体を起こし、彼は薄暗い室内へと戻った。

「Dr、私がやりましょうか？」

「いや、オマエはソッチに集中してくれ」

持ってきたカップから煎れ立てのコーヒーの香りが立ち昇り、鼻腔をくすぐる。

熱いソレを注意深くすすり上げながら、

サンプル採取した脳細胞を認証装置にスキャンさせた。

「運の無いヤツの正体は・・・と。」

DNA 認証用の機密データベースにコッソリと潜り込んで、コイツと合致するデータの持主を探す訳なのだ。

普段以上に時間が掛かっているのが腑に落ちない、どうしたんだ？合致データが浮かんでこない。

特ランクの嚴重管理か・・・それとも、特区扱いのデータか・・・
「間違えなく、特区だな」

独り言を呟きながら、更に深く潜り込む事にパネルを弾く指が軽快に動く。

より難解で強固なガードを潜り抜け、侵入したことすら気取られないように。

「Dr、不謹慎です。」

「なにが？」

「面白がっていると、捕まりますよ」

彼はニヤリと口元だけ歪めてみせると、オレが捕まるって？とでも言いたげに首を振る。

そして、スグに指をパチンと鳴らして言った。

「あつたぞ」

素早くそのデータファイルコピーすると、侵入経路の偽装とトラップまで貼るといった

念の入れようで浮上してきたのだ。

「かえってバレそうです」

「その時はよろしく、メイ」

無責任にメイの仕事を増やした彼の視線は、既に目の前のモニターを睨みつけていた。

「ヤレヤレ、大変なのを連れてきたぞ」というのが、彼の本心。その名前、一度や二度ならずとも耳にした事がある。

関係者の間では名の通った奴じゃないか・・・

彼自身、生憎1度も接触された事は無いのが残念なほどだ。

裏稼業、機密専門の盗人だが、高額な成功報酬に余りある仕事をすると。

もつとも、狙われたらそれこそ最後ということになるが。

「マサカドだ」

「通報しますか？」

「その必要はない、死亡扱いだ。」

腕組みをしてイスにもたれたまま、横の乳白色の溶液の入ったポットを見つめる。

メイはコピーを終えて、次の処理に入っている。

乗りかかった船、最後まで再生してみるか・・・後は本人次第。

「また面白がってますね」

「ああ、こんなに面白いオモチャは久しぶりだからね」

「悪い冗談ですよ」

少し冷めてしまったコーヒーの苦味が、口の中に広がっていく。

「コイツ・・・データ改ざんしてるのか？」

モニターのデータを、改めて凝視しながら彼は呻いた。

マサカドのDNA認証データは、抜け落ちた部分が多すぎる虫食い状態。

特区管理のはずなのに・・・ありえない・・・あまりにも不自然に思えた。

「どう思う？」

「改ざんはされていないようです」

「どういう事だ？」

通常、母親が身ごもった時点でデータベースに登録され、生れ落ちたと同時にDNAが認証用に採取されてしまう。成長と共に詳細なデータが管理されてしまうこの世の中で、母親のデータすら記載されていないのは何故だ？

「闇っ子か？」

「そのようですね」

マサカドのデータが発生しているのは、5歳。

受診したのがきっかけのようだが・・・その実のところは不明だ。

このデータ自体、あてにならないな。

稀だが、人目を隠れて産み落とされる子供がいる。

理由はまちまちだが、その子たちの殆どが登録されるのは医療機関に接触した時点。

大概が貧困層であることは間違いない。

「メイ、さっさと終わらせよう」

「はい」

はつきりしないマサカドの過去ではあったが、その犯罪歴だけは詳細に記載されていた。

マサカドが関わったと思われるものから、確実に手を下し雇主が割り出されているものも。

何度か、警察にも捕まっていることがあるようだ。

仕事を始めたばかりの時期、小さな物件ではあったがその際に身体
の部位を失っている。

奴がJJと呼ばれる、義四肢胴体であつた理由も
ジャンピングジャック

この辺から推測がつくが・・・全身を機械人間に作りかえる必要があるだろうか？

最低限必要とされるDNAが残されていれば、ほぼ完璧なまでに肉体再生出来るというのに。

これほどまでに再生工学が発達したこの世界で、マサカドがJJにこだわった理由・・・

脳髄だけを残して肉体をメタルに変えた人間の尋常でない行動に、彼は不思議と自分に通じるものを何処と無く感じていた。

beat 5

砂の嵐に閉ざされる季節が訪れようとしていた。

2、3日前から吹き始めた強風は、彼のお気に入りのラナイを瞬く間に砂で覆いつくしてしまった。

これから2ヶ月ほどは満足に外にも出られない、

あのジリジリと肌を焼く太陽の日差しさえも懐かしく思えるはずだ。窓を叩く砂混じりの風を恨めしく睨みつけながら、これから始める作業を前に大きく両腕を天井に伸ばした。

「用意はできているか？」

「ハイ、いつでも大丈夫です」

メイに任せておいた脳髄の再生処理は、昨日、無事終了した。さすがのメイも完全体に再生するまで、相当手こずったように思える。

自分の中に納まっている全データを検証し施された処理は、一般的な都心の再生施設であれば数ヶ月は掛かったであろう。それを3週間と3日で終えた処理能力に、メイの大きな成長が伺える。

「一昨年なら、ここまで2ヶ月は掛かってたな」

「そうですね、昨年の蘇生処理で大きな躍進がありましたから」

薄い緑色の液体の中に浮かぶ美しい脳髄を見つめながら、

今、マサカドが何を思っているのか想像する。

『さつさと始める』、そう言っているように見えるな・・・と、彼は頬を緩めた。

「さてと、ヤルか」
「ハイ」

無菌状態の小さな箱の中で、自分の手先のように動くアームを見下ろした。

1つの細胞核を人工的に再生し、細胞を分裂させるための初めの一歩。

彼は大きく息を吐いて、そっとペトリ皿へ向かってその先端をゆっくりと降ろしていく。

上手く分裂を始めてくれよ・・・

ほんの瞬間の出来事だが、生命を創生するようなその一瞬。まさに、神と自分が重なるような錯覚が彼を包むのだ。

ただし、彼が行っているのは生命のない器の部分。

しっかりと管理していないと、スグに干からびて全ての苦勞が無駄となる。

そして、その管理は優秀な助手、メイに任せられるのだ。

「メイ、一定量まで増殖したらKB320を注入してくれ」
「ハイ」

まあ、上手くいかなければ同じ事を繰り返すまで。

再生された肉体は器ではないことを、彼は十分に理解していた。

だから、神の領域を侵しているといった呵責に悩むことなく

この技術にのめりこみ、これまでずっとその先駆者として走り続けてきたのだ。

再生された肉体は、熱のあるジャンピング・ジャック、操り人形ではない訳だ。

制限の多いメタルの身体より、比較的簡単に再生する事の出来る肉

体。

しかも、何の違和感なく拒絶反応すら抑えられたこの技術は、大勢の人々に支持された。

それは「永遠の生命を手に入れる行為に似ている」と、彼はずっと感じていた。

「Dr.、一定量超えました」

「一発OKか、優秀だな」

「では、KB320を注入します」

「ああ、形成し始めたら脳髓と結合させてくれ」

「ハイ」

KB320、彼自身が昨年開発した分裂促進剤で、これを用いる事で8倍の分裂速度を得る事が出来る。

明日の朝には、例のガラスの棺の中に脳髓と共にユラリと揺れる、まだ形のない物体を確認することが出来るだろう。

どんな肉体を再生してくれるやら、マサカドとの初対面を思うと僅かに心躍った。

通常の再生処理と今回の大きな違いは、原形が確認されていない事だ。

失した肉体を補修する目的で行われる再生と違い、ゼロからの再生。DNAの記憶と脳の記憶を頼りに行われる再生には、メイのようなAIを備えた制御装置の存在はは欠かすことが出来無い。

メイは脳髓の完全修復を行う共に、脳の解析も行っている。そこに留めてある筈のマサカドの肉体の記憶を元に、新たな器を構築するからだ。

「メイ、器の計算は終わっているのか？」

「ハイ、ただ・・・」

「なんだ？」

「マサカドの認証データとの相違点が多いので、Dr. に確認して頂きたいのですが」

先にモニターに映し出されたのは、マサカドの認証データに保管されていた姿。

男なら少なからずとも憧れる、長身の筋骨隆々とした逞しい均整のとれた体つき、

ブルーアイにブロンドの髪を持つ、女性には不自由しそうにないハンサムな青年であった。

しかし、それはあくまでも「J」としてのマサカドの姿。
本来の彼の姿を知る術は無いのだが・・・

「これは・・・」

「私の解析の結果は、ご覧の通りです」

目の前の事実、彼はよろめいた。

メイの解析から構築されたマサカドの姿・・・

その姿に、心の奥底に眠っていた古い記憶が鮮明に甦る。

「悪い冗談か？」

そのままイスにドツカリと腰を下ろして、所在無く宙を漂った視線がたどり着いた先。

それは、ユラユラと水溶液に揺らめくマサカドの脳髓だった。

beat 6

深い眠りから目覚めた彼女の瞳に写った世界は、きつと殺伐としていたに違いない。

オブジェクトに包まれていた世界が、リアルなままに彼女に襲い掛かったのだから。

目覚めた彼女が辿った短く辛い人生を思うと、彼自身が施した処理が適切であつたのか

倫理的に許される行為であつたのか・・・多くの疑問点を彼に投げかけていた。

彼が初めて脳髓の再生処理を施した女性は、いわゆる・・・白痴であつた。

それまで不可能とされてきた、脳髓の再生処理を初めて成功させた彼の功績は大きなものだったが「あの時、オレは慢心していなかったか？」と、込み上げてくる不快感。

「Dr、Dr、ハマクラ、処理を中止しますか？」

「あ、ああ・・・いや、続けてくれ」

「ハイ」

メイの声に、彼の意識が現実へ引き戻されるが、「因縁」そんな言葉がふと頭に浮かび、再び意識は記憶の中に沈んでいった。

爆破事故に巻き込まれた少女を、血塗れのまま彼の元へ連れ込んだ老夫婦は

その腕の中で奇跡的に息をする、最愛の娘の命を繋ぎとめて欲しいと懇願した。

見るからに裕福とはいえない彼らを、追いついてしまえば・・・

けれど、彼は言った「脳髓再生処理の有用性を立証したい。」

「その最終テストを彼女で行いたい。」「それしか彼女が助かる見込みは無い」と。

夫婦にとって、その言葉はきつと無慈悲に響いただろう。

横たわる少女の、失われた部位・・・

その生命の灯火が、今にも閉じようとしている事は容易に伺い知れた。

老いた男が口を開いた「お願いします」と。

目を伏せた妻の肩をしっかりと抱いて、少女をじっと見つめながら。

淡々と進められた作業を、部屋の片隅でジッと見つめる老夫婦の土気色の顔を

今でもはつきりと思い出せる。

あの夫婦がこの部屋の片隅に立っているような錯覚を覚え、彼は八つと顔を上げた。

「あれから25年か・・・」

四半世紀も経っているのに、この遅々として進まぬ再生工学の実態。既に今の技術をもって挑むには、限界に達しているのかもしれない。

真新しい進歩のないまま、彼が25年前に確立した再生工学の基礎は、

それから何の奇知も生み出さないままだ。

早過ぎたのか？いや、神の領域に近づきすぎて、皆、恐れをなしたのだ。

「高い倫理観の下に」という建前まで掲げ、神の真似事をする言い

訳を考えている。

そんな自分も、こんな場所で隠遁生活を送っているのだから、他人のことをとやかく言う資格などは無いのだが。

「Dr、何を考えているのですか？」

「25年前の成功を思い出してね」

「私もです、ビニーのことを思い出しました」

メイが再生処理に大きく関わった、最初のその実験。

彼女の制御が介入していなければ、脳髄再生の現在が変わっていたかもしれない。

その実験体が、ビニー。

まだ17歳の白痴の娘であった。

爆破事故で負傷した頭部の、特に前頭葉部分が大きくダメージを受けていた。

脳髄の再生と共に、吹き飛んだ肉体の部位を同時に再生させたのだ。

「ビニーは穢れを知らない女性でした」

「そうだな」

メイが意図的に使った「穢れ」という言葉に、彼の良心がチクリと痛んだ。

自我を覚醒させられた白痴の娘は、穢れを知らぬまま3年後に亡くなったと聞いた。

ビニーは・・・自らその命を儚く散らしたと。

モニターに映し出されていた、マサカドの肉体の設計図は、あくまでも予想図でしかない。

それはわかっている、そのシステムを組んだのも自分だ。

システムの弾き出すモノの確率がどの程度であるか、わかっている、

わかっているけれど・・・

そこにあっただのは、そうなる筈であっただビニーの姿。
成人し大人の女へと成熟した、ビニーの姿だった。

beat 7

Dr・ハマクラは、お気に入りのテラスで短い春の訪れを喜んでいた。

たった数週間で過ぎ去る春の穏やかな気候に、一時だが庭に緑が萌える。

生命の力強さに驚嘆させられると同時に、自然の営みに抱かれている自分を感じていた。

一月前の雨降る晩に、マサカドの再生は終了していた。

降り続いた雨が窓を叩くその夜に、「再生が完了しました」とメイは彼に告げたのだ。

頭も身体も完全に修復再生されてはいたけれど、「彼を目覚めさせていいものだろうか」と

こうしてまどろんでいる今でも、彼の頭をそのことが占領していた。

「めずらしいですね、Dr・が日向ぼっこなんて」

背後からの突然の声に驚いて振り返ると、制服を着た見覚えのアル顔が笑っていた。

第3特区警備班少佐ジェイス・キタムラが、姿勢良く直立して。

嫌な予感が彼を襲う・・・何をしに、今ごろ何をしに来たんだ？

精悍な笑顔の下に隠れている、少佐の目論見は何だ・・・

「珍客だな、どうだ腕の具合は」

「問題なく。ところで、お尋ねしたい事があるんですが」

「なんだ」

優雅に制服の裾をひるがえして、彼の隣に座った男は

被っていた制帽を脱いで、テーブルの上に置いた。

「何か、飲むかい？」

「ありがとうございます、宜しければ水を一杯」

彼は立ち上がって薄暗い家の中に入ると、素早くメイに指示を出した。

「メイ、マサカドの痕跡を隠してくれ」
「ハイ」

グラスに冷たい水を入れ、戻ろうとした矢先、耳元でメイが唸った。

「彼がバイクを見えています」
「そうか」

結局、あの時のまま放置されていた汚れたバイクとマント。何ヶ月もの間野ざらしにしていたけれど、ジェルがこびり付いている事には変わらない。

やはり、ジェイスが追っているのはマサカドなのか・・・

彼がテラスに戻ると、少佐はまったく動いていないかのように先ほどと変わらない様子でその場に座っていた。

「すみません」

そう言ってグラスを受け取った再生した右腕は、Dr・ハマクラが3年前に手がけたモノだ。

「お父さんは元気かい？」

「ええ、相変わらず。毎日怒鳴り散らして部下に当たってますけどね」

「あはは、それは良かった」

ガタイのいい、旧友の元気な姿が目には浮かぶようだ。

親子ほど年の離れた二人の不思議な友情を、目の前の彼の息子は理解できないだろうな。

彼の父親もまた、特区の警備班大佐の役を担っている。

「それで、聞きたい事とは？」

「ええ、数ヶ月前にこの近くに墮ちた脱出ポットについてお聞きしたくて」

「ああ、アレか、憶えているよ・・・」

どこかの警備艇が、脱出ポットを追撃した違法行為のことだろ？

その真下にいたからね、危うくコッチがやられるところだった。あれは、キミの部下か？」

少佐は悪びれず、ただ肩をすくめて見せた。

「中に居た人物はご存知ですか？」

「さあな、手足は吹っ飛ばされて黒コゲの」J」だったことは知っているが」

少佐はテーブルに肘をつき、その上に母親に似た端整な顔を乗せ芝居がかったような思案気な目つきでDr.を見つめた。

「単刀直入にお聞きします。あなたですか、ヤツの首を持ち帰ったのは？」

「知らないな、」J」を好むヤツに興味はないからね」

ジェイスはテーブルに置かれていた制帽を被ると、静かに立ち上がり形式通りの敬礼をした。

そして、立ち去り際に、庭のバイクに視線を投げて、静かな口調で言い放った。

「車体の脇に、」用の保存液が垂れていましたよ」

「そうか」

「では、失礼します」

妙にカンの鋭いところは子供の頃から変わらないな・・・ただ・・・そのカンも余計に働かせ過ぎると、自分の首をも絞めることになるか？

家の裏で土煙が巻き上がる。一隻の警備艇が霞が掛かった空へと上昇していった。

その船底を見上げながら、彼は唸るように言った。

「メイ、スグにマサカドを起こせ、スグにだ」

「スグとは？」

「可能な限り早く」

beat 8

目の前に広がるのは、薄く緑色に霞掛かった世界。

揺り籠に揺られているような、母の胎内にいるような穏やかで幸福に満ちた世界。

この暖かな気持ちにうっとりしていると、次第に身体に感覚が甦ってくる。

ダラリとしたこの身体感覚は何だ？

久しく感じたことの無い、血の流れ・・・軋むように動いた指。暖かな羊水が引いて行き、寒々とした外気に身震いする。

身震い？

一気に覚醒していったオレの脳みそは、べつとりと身体にへばりついていた

この粘性の高い溶液の正体を容易に理解していた。

なんてことを・・・施された処理で現実に戻されたオレは全ての溶液が無くなり、このガラスの棺おけが開かれるまでじっとそのフタを睨み続けていた。

「排水作業終了、洗浄します」

聞きなれない声と同時に噴出されたシャワーに、息を詰まらせる。感じたことの無い異様な痛みが、全身を洗い流している間どうにか冷静を保っていられたのは、上から覗いていた男の顔があったからだ。

「大丈夫か？」

その男はそう言って、開かれた棺おけの中に横たわるオレに手を伸ばした。

「触るな」

自分の喉から発せられた異質な声にギョツとして、口をつぐんだ。なんだ、この甲高い声は・・・オレの声じゃない・・・そして、見下ろしたオレ自身の事の重大さに改めて愕然とする。なんてことを・・・なんて・・・偽善に満ちたその面を睨みつけながら、ゆっくりと棺おけから起き上がった。

「まだ、無理に動かすな」

男は無理矢理オレの身体に手を回して抱き上げると、そっと傍らの長いすに降ろした。こんな男に抱き上げられるなんて、こんな・・・こんなものはオレじゃない。肩に掛けられたバスタオルで隠れてしまうほど、貧弱なこの身体はなんだ。細い腕、棒の様な脚・・・長い黒髪がべったりと首筋から背中に張り付いていた。

「ゆっくり覚醒させるつもりでいたんだが、そうもいかなくなつて特区が感ずいてしまったんだ・・・私はキミをかくまう事が出来ないんでね。」

ああ、そうか、そういうことか・・・この男のお節介でオレはこんな事になった訳だ。

残されていた記憶は、脱出ポットで逃れたのが最後。
その後の事は、簡単に想像がつくってもんだ。

「どういうことだ・・・この身体はなんだ」

「勝手だとは思ったが、目の前で助かる人間を見捨てる事が出来なくてね」

「オレが誰かわかっているのか？」

「ああ、知っているよ・・・マサカドだってことは」

知っていて、この仕打ちか・・・この男はどこまで自分勝手なんだ・・・

閉じ込めていた怒りが一気に噴出して、オレの胸を焼き尽くす。

「アンタはどこまで身勝手なんだ！オレが」」でいた理由も知らず
よくもこんな真似を・・・一体、どこまでオレをもてあそばさば気が
済むんだ！」

「勝手に再生してすまなかった・・・しかし」

「すまなかった？それだけか！え、オマエはオレを玩弄してるんだぞ！」

オレの剣幕に怖気づいたのか、ヤツはノロノロと後づ去って装置に
背中を押し付けた。

オマエは、オマエって男は・・・母ならず、オレにまで・・・玩弄
と言わずしてなんなんだ！

「何をそんなに・・・落ち着きなさい」

「落ち着きなさい？じゃあなんだ、この再生された肉体は！」

「キミのDNAから構築した器だ」

「なにが構築だよ、クサレが！オレは」」になる前から男だったぞ
！！」

「そんなはずは・・・解析は完璧に行っている」

「アンタの脳みその方が狂ってるんじゃないか？」

ああ、そうか・・・自分が信じているほどアンタは天才じゃないってことだ」

呪った・・・目の前の男を、自分自身を、母を・・・そして意地悪な神さえも。

与えられたこの呪われた肉体は、写真でしか見たことのない母親そのもの・・・

何かの陰謀、策略なのか？こんな身体を与えられたオレはどうすればいいんだ。

ガチガチとかみ合わない歯を鳴らしながら、悪寒に耐える事になるなんて。

「キミの言っている事がわからない」

「大天才、Dr・ハマクラにもわからないことがあったとはね」

「私を知っているのか」

「ああ、知っていると。オレの母親にした仕打ちを、またオレにするなんて・・・たいした天才だよ、ヒトの道に外れる。」

こんなところでコソコソ生活するはずだよな、オマエは悪魔に魂を売ったんだな」

頭が痛い。

自分の怒鳴り声が頭の中で鳴り響き、こうして身体を支えているのも限界に思えた。

感じた事のない身体の冷えに震えながら、目の前の男が口を開くのを待っていた。

beat 9

オレが投げた言葉の意味をキチンと理解したのか定かではないが、ヤツは無言のまま、オレに自分の衣服を手渡した。

身体に滴る水滴をキチンと拭き取らぬまま、目の前の男の匂いのする洋服の袖を通す作業は

目覚めたばかりのこの身体には至難・・・片腕、指1本動かすにもギシギシとした痛みが肉体を襲う。

「早く行きなさい」

「・・・」

「どこへでも好きなところへ」

重力と自重によるめく足を、なんとか意志だけで動かして、戸口へと急ぐ。

そしてまた、1から作り上げなければならない肉体を思い、ウンザリとしながら。

「ソレを使いなさい」

「・・・」

ヤツは庭先に捨てある、腐ったバイクを指差す。

長い事雨風に晒され、エンジンに砂が噛んでいるのでは・・・動くのか？

小雨が降り始めた薄暗い空を見上げ、己の不運に腹が立った。

「早く」

遠くの空を見つめながら、忌み嫌われるものを追い払うような仕草

をした。

バイクにへばりついた無数の固形物が、脱出ポットのジェルだと気が付いたのは

汚いマントを剥ぎ取った時。その下に、まだ柔らかなソレを見つけたからだ。

不安を胸にスターターボタンを押したが・・・案の定・・・ええい、ままよ。

オレは車体の側部を、今、出来る限りの力で蹴飛ばす事に成功した。ブーンと鈍く唸りながら、バイクはとりあえず息を吹き返してくれた。

「来るぞ、行け！」

男の声を合図に、オレは荒野へとバイクを走らせる。

空の上で、こちらへ迫ってきた数機の警備艇に向かって行く様に。

「メイ、キタムラに連絡を」

「ハイ」

バイクが思いもよらないスピードで、小さくなっていくのを視界の端で捕らえながら

彼は、真っ直ぐコチラへ向かう5機の船影を、ハッキリと確認していた。

「ハマクラ、私だ」

「スマナイ」

耳に響く、旧友の低い声。

「どうした、厄介事か？」

「ああ。スマンが、マサカドのデータを見せてくれないか？」

「どのデータだ？」

「勿論、オマエの持っているヤツだ」

数秒の沈黙の後、旧友は承知する。

「ジェイスが、ソッチへ向かっているか？」

「ああ、あと1分で着く」

「わかった、5分後に引き上げさせる」

「すまないな」

こうして話している最中に、警備艇は猛走するバイクに気が付いたようだ。

1機が急旋回してバイクの後を追いつ始める・・・

マサカドのことを心配はしていない、気がかりなのはアイツの話だ。オレが、マサカドを玩弄していると？アイツは確かにそう言った。

一体、どういう事なのか・・・アイツが元より男であったというのは事実なのか？

「メイ、マサカドをモニターしているか？」

「ハイ」

4機の警備艇は、空気を巻き上げながらも、恐ろしく静かに降りた。空気の振動と巻き上げられた風に眼を細めながら、Dr・ハマクラは寂れた家屋の前に降り立った、旧友の息子を黙って見つめていた。

「逃がしましたね」

「なにを？」

「マサカドです、アナタはマサカドを再生させたはずだ」

「そう思うか？」

ジェイスはハマクラに向けた怒りを抑え、その強張った顔と異様に鋭く光った目つきで目の前の彼を見据えていた。

『Dr、バイクが警備艇に止められました』

メイの声が耳の奥に届く。

4名の部下が少佐に付き従うように後方に控え、その片手は腰の装備に置かれている。

「で、私に何か用かね」

「中を調べます」

「好きにきなさい」

少佐が手を上げると、部下は靴音を鳴らして家屋の中へ押入った。

「それで、マサカドを追う理由は？」

「マサカドは、第3特区で大量殺人を犯しました」

「そうか」

『DNA認証を受けましたが、登録データと合致しませんでした』

どういうことだ・・・認証がパス出来た理由・・・メイの機転か？そしてジェイクは、バイクを追った部下からの報告に、怒鳴り声を上げた。

「いいか、絶対、マサカドだ！確保しろ！！」

『しかし、違法行為です』

部下の戸惑った声が、メイの傍受モニターを通じて彼の耳にも届く。そして間を入れずに、先ほどの約束の通りに、旧友の音がする。

『ジェイク、私だ。スグに戻りなさい』

「は？今、マサカドを確保できそうなんです」

『命令だ、帰還しなさい』

「わかりました」

ジェイクは彼を睨みつけながら、それが全て彼の仕業と確信したように大地にツバを吐いた。

「まったくアナタという人は」

「キミら親子には、まだまだ貸しがあるからね」

「マサカドを庇う理由は何ですか？」

「庇う理由など無い、私はマサカドなど知らんのだから」

ハマクラの知らぬ存ぜぬといった態度に、少佐は露骨に不快感を表しながら

屋内の部下を呼び戻して言った。

「お前たち、帰還命令だ。Dr・ハマクラ、マサカドは必ず確保します。」

そして、間違えなく死刑台に送ってみせます。」

マサカドに向けられている憎悪に声を震わせながら、ジェイクは背を向けた。

その背中に向かって、ハマクラは言葉を投げる。

「なぜだ？」

ジェイスは、立ち止まった。

「ヤツが・・・愛する人の命を・・・奪ったからです」

立ち去る彼の背中の憂いに、ハマクラは黙って警備艇を見送った。

「すみません、お手数をお掛けいたしました」

警備兵は明らかに困惑した表情でそう言うと、礼儀正しく礼をして警備艇に乗り込んだ。

あの時、オレを撃墜したうちの1機であることは明白・・・ぶっ潰すか？

でも、どうやって？こんな華奢な肉体でか？手を振り上げただけで大地に膝を付くことになるだろう。

猛スピードで走っていたせいか、オレを見つけた5機の警備艇のうち1機が

予想通り行く手を阻んだ形で、荒野へ着陸してきた。

逃げ隠れする場所も無く、素直に指示に従った方が懸命・・・生憎、この格好だ。

「お嬢さん、これからどちらへ？」

ニヤリと不敵に笑ったその顔に、微かだが見覚えがある・・・あの少佐の直属の部下。

男は、銃に片手を残したまま、ゆっくりとオレに近づいてきたのだ。

「こんなヘンピな場所で、急いでどちらへ？」

「ええ、ちよつと急用が・・・」

自分の喉を震わす馴染みの無い声に違和感を覚えながら、慣れない女を作り上げる。

「申し訳あれませんが、DNA認証をお願いできますか？」

「え、ええ・・・」

ヤバイか？

不安を隠しながら、その警備兵がスキャン装置をかざすのをジッと見つめる。

その間、幾度か湿った風がオレの長い髪を揺らしていた。

「そ、そんな・・・し、失礼」

3度、同じ行為を受けながら、腹の中でオレは、ほくそえんだ。
あの博士も上手いことやってくれたって訳か・・・肉体だけでなく
遺伝子まで整形してくれていたとはな・・・ありがたい。

「少佐、不都合です・・・しかし、それは違法行為です」

ふん、逃げる手間が無くなったか・・・

「急いでいますから」

「は、はい、ご協力ありがとうございました」

目の前の危機を乗り越えたオレは、安堵する。

この姿は気に入らないが、しばらくは使えそうだ・・・
遠ざかる機体を見上げながら、心底から笑いが込み上げる。

「さて、行くか」

が・・・今度の敵は・・・オマエか・・・この腐れバイク！
まったく動こうとしない車体の横っ腹を蹴飛ばすと、車体はそのまま大地へと横になった。

あらら、タンクに穴まで開いちゃって・・・サイアクだな、こりゃ。
必死でバイクを走らせていた肉体は、既に限界でところどころ悲鳴
をあげている。

もつと余裕を持って起こせつての！あのクサレが！！

自由の利かない出来損ないの身体を引きずって、歩けたのは数メー
トル。

そのまま天を仰ぐように、ゴロリと仰向けに倒れこんだ。

頭上を流れる雲の速さ、雨雲を追い越してきたから・・・じきに雨
水が大地を濡らす。

遠くで鳴り響く雷鳴を耳に、オレの力は地底へと吸い込まれていっ
た。

「起きろ」

憶えのある、リアルな声に目を開いた。

土砂降りの雨が容赦なくオレの身体を叩いている、目の前の貧相な
顔から

流れ落ちる雨水がオレの顔に滴って、急に抑えよつの無い怒りが身
体にみなぎる。

「このヤロー」

振り上げた拳は宙を切り、無駄に泥水の中に寝返りを打ったのはオ
レ。

「まだ無茶をするな」

「なに？無茶をさせたのはオマエだろうが！」

ハマクラはオレの身体を軽々と担ぎ上げると、幌付きのトラックの荷台に乗せる。

冷え切った身体の節々が固く、腕も脚も曲げることさえ出来ずに横になったまま

ガチガチとなり続ける歯をキツクかみ締めてみたが、それは無駄と
いうものだつた。

「Dr、体温39度2分です。このままでは肺炎を併発します」

「わかった、メイ、準備をしておいてくれ」

「ハイ」

ヤツは無言で運転席からオレを一瞥する、とスグに車を走らせた。

幌に打ち付ける雨音と、荒地を走る車の振動で気が狂いそうになる。
オレの周りを飛び回る白い球体の発光で、かろうじて意識を留めて
いたけれど

上手いとはいえない男の運転する車が跳ねるたびに、揺れる頭が朦
朧とする。

「Dr、意識レベルが下がりました」

「構わん、どうせ寝てもらうんだからな」

またあの棺おけにいれるつもりか・・・こうなったら最後まで面倒
みて貰おうじゃないか。

こんな馬鹿げた器を廃棄して、さっさと元のメタルの身体を取り戻
してやる。

そうだ、絶対に・・・

beat 11

窓ガラスを叩く雨は3日も降り続いていた。あと数日、嫌というくらい降り続くはず。

雨が上がれば、待っていましたとばかりに、さらに生命が力強く息吹く・・・

キタムラが送ってくれたマサカドの資料に目を通しながら、彼は何度も何度も深いため息をついていた。

「Dr、マサカドの熱が下がりました」

「ああ、後は頼む」

「ハイ」

メイはユラユラと宙を漂いながら、ゆつくりと発光していた。

穏やかなその光りに、彼女が母性に近い感情でマサカドの世話をしている事がわかる。

AIに、人間の母性が発生するかは微妙だが・・・言い表すには丁度いい。

ガラスの棺にユラユラと揺れながら眠るマサカドは、眠り姫の如く永久の夢を見ている。

その真上に留まると、メイは感嘆の声を上げた。

「Dr、このマサカドは美しいですね」

「どうした、急に」

「人が好む美しさを備えていますね」

「美しさの尺度は人によっても違うがね、私も美しいと思うよ」

益々、人間染みたメイの言葉に苦笑する。

人並みの審美眼を、どのように学習したのかと。

「メイ、キタムラの資料の信憑性をどう思う?」

「ハイ、憶測で書かれている部分も無いとは言えませんが、70%程度の信頼は可能です」

「そうか」

再び彼は、ため息をつく。

キタムラがこの資料を流出させたことが知れば・・・いや、余計な心配はすまい。

それも承知の上で、旧友は自分にマサカドを託す決意をしたのだから。

確かに、マサカドはビニーの子であった。

彼女がどのようにして身籠ったかは不明だが、悲劇的な事実を想像するのは容易だ。

ビニーはマサカドをひっそりと産み落とした、資格を持たないスラムの医師の下で。

子供のDNA登録をすることなく、母子は最下層で命を繋げて生活していたようだ。

ビニーが亡くなったその日に、マサカドのDNA登録がなされている。

その奇妙な因果関係・・・関わるのは、特区の機密機関の名前が記されている。

それは、幾度か目にしてきた出来事と同じ、まあ、いいでしょう。

しかし、一番に驚かされたのは、マサカドの知能指数の数値だ。

保護された時点において、145を示している。

稀に親よりも知能が高い子供も生まれるが・・・これ程は・・・

彼が再生した後のビニーの知能指数は、一般的な105を示してい

たからだ。

その後の検査においては、最高値に近い数値158を記録している事実。

これまでの手元のデータに無い事例に、彼は多少なりとも興味を抱いていた。

ビニーの再生時に何か変異があったのかもしれない・・・

「Dr、マサカドを覚醒させますか？」

「いや、五月蠅いだけだ、寝かせておけ」

「しかし・・・」

「なんだ？」

「話し合ったほうが良いのでは？」

「なにを話し合えと？」

「マサカドはDr．に不信感を抱いていますから」

鼻先まで近寄ってくると、メイはチリチリと音を立てた。

なぜメイが、そこまでマサカドを気にするのか、彼には理解できなかった。

しいて言えば、再生させた責任と義務を果たすかのようなものか。

「話し合って何になる？」

「相互理解に」

ぷははは！

ハマクラは大きく仰け反って、笑った。

このAIからそんな言葉が飛び出そうとは・・・

彼の知らないうちに、また一段と人間臭くなっているメイを面白いと思うのだった。

「もう少し、考え事をしたいんだ」
「わかりました」

彼の元を離れたメイは、スーッとマサカドの傍に寄り添うかのように漂っていった。

そんなメイの様子に苦笑しながら、Dr・ハマクラは疲れたように眉間を押さえ目を閉じた。

窓を打つ雨音に耳を傾けて・・・。

ひどくだらしなくなるような生暖かい液体の中で、オレは度々目覚めていた。

その度に、窓辺のイスに疲れた顔の男が座っているのが目に入った。そして、オレの頭上で光りながら宙に浮く丸い球体も。

目覚める感覚が短くなってくると、オレは漂う身体を持て余すようになる。

意識ははっきりとしているのに、オレに意志に従うことのない身体・

・

メイと呼ばれるあの球体、AIの仕業であるのは明らかだが。

ストレスがジワジワと意識を蝕んでいつて、気が狂いそうなほどだ。

今日もオレは意識の全てを聴覚に集中し、ヤツらを伺っている。

二人の会話を一つも逃さないようにと。

今朝からユラユラと宙を漂う球体は、何か言いた気にハマクラの元とこの棺の間を行ったり来たりと落ち着かない様子でいた。

窓辺の男は、難しい顔をしながらファイルを読んでいる。

そのファイルがオレのものだという事は、承知していた。

しかも、特別ファイルだってことも。

オレの知らないオレの全たってヤツだね。

けれど、その事実を知っているのは、オレとそしてアイツだけなんだ。

可哀想な母の身に起こった悲劇・・・それがオレをどんなにか苦しめたか。

アイツは・・・そ知らぬ顔で・・・

「Dr、そろそろ出してあげては？」

「なに？」

「マサカドを出してあげてもいいのでは？」

「イヤだね、何をされるかわからない」

「でも・・・マサカドは・・・」

「ああ、わかってるよ、起きているんだろ？」

「可哀想です」

「出して暴れられたら、私の方が可哀想じゃないか」

「マサカドの筋肉にそんな力はありません」

「オイオイ、お前はどっちの味方なんだ？」

「そういう問題ではありません。Dr、また恨まれますよ」

「・・・お前が責任をもつて、全てを面倒をみるならな」

「全ての面倒をみるのは不可能です、私には人の身体がありません」

毎日がこの繰り返しで、AIがオレに同情的なのは意外だったが。

母親に近い愛情を注いでいるかのようだ・・・目を覚ますと必ずソ

コにAIがいる。

人工知能の学習能力がこれ程まで高いのは、ハマクラの持てる技術の高さからか？

いや・・・こいつは機械ではない気がする・・・以前、耳にした事のある・・・

再生された脳細胞を使って組み上げられたAIの話を・・・禁を犯した者の噂。

いいや、噂ではない事をオレは知っている。

アイツがこんな辺境で隠遁生活を送っている理由が、このAIにあることを。

長い髪の毛が、皮膚に絡みつく感触がたまらなく不快だった。腹立たしく目の前のAIを睨みつけた。

数回チカチカと点滅したかと思うと、初めてメイはオレに話しかけた。

「もしあなたが約束してくれるなら、私は装置を解除します」

声も出すことすら出来ないのに・・・

「約束してください、Dr.の指示に従うと。Dr.に危害を加えないと。」

そして、私の身の安全も約束してください。約束できるなら、目を1度閉じて」

強靱なはずのオレの精神は、完全にくたばっていた。

拷問に近いこの肉体、この環境の中で、発狂しなかったのが不思議なほど。

オレは、ためらうことなく瞼を閉じた。

「約束を守ってくださいね、もし、破ったら・・・私があなたを殺しますから」

チカッと溶液に響いた音と共に、オレの身体を縛っていたAIからの信号が途絶えた。

一気に押し寄せた倦怠感・・・固く閉まった関節の苦痛に顔が歪む。

「まだ、動かさないで。今、楽にしますから・・・1時間ほど待って下さい」

数回チカチカと音がすると、身体感覚が徐々にではあったが確実に快適になっていくのが感じられた。

「前は、この処理を省いてしまったので辛かったはずだ」

ああ、まったくだ。

いきなりたたき起こされて、陸に打ち上げられた魚のようだった。激痛に身悶えながら、それでも身体を動かしたのが最後の精神力。途切れた力が、二度と戻ってはこないように感じているのは何故だろう。

そうだ、与えられたこの肉体に絶望しているからだ。

オレはゆっくりと首を動かして、

窓辺のイスに座り、コチヲをじっと見つめる男を見つめ返した。どうやって借りを返してもらおうかと考えながら。

青空に両手をかざして、透き通るほど青白い両手を見つめた。陽の光りに、体内に流れる血が薄っすらと透けて見えそうだ。棺から出されて3週間が経った今、毎日が無駄に過ごすしかなかった。

まるで老人のように力の無いこの肉体を引きずって、この丘まで散歩してくるのは、メイがオレに科した日課の一つ。人並みの体力と抵抗力を養うためだと、朝食が終わると家を叩き出された。

細く柔らかな長い髪が、汗ばんだ顔にひつついて離れない。何度も切ってしまうおうとハサミを手に持ったのに、執拗にメイに止められた。

「美しい髪だから」というだけの理由で、無意味なことを言う。

青々と息吹いた芝の上に大の字になって、深呼吸する時だけオレは爽快な気分になれた。だから、嫌々でも散歩を続けている。けれど今日は、アイツも一緒に付いて来やがった・・・

「どうだ、慣れたか？」

「何に？」

その響くような低い声に、ビクリとする。

横たわったまま、オレはヤツの方へ顔を向けた。

「その身体に」

「動かすことには慣れた」

「そうか」

オレの傍らで腰を下ろしたハマクラは、遠くを見つめていた。遠くにみえる、自分のあばら家を。

「聞いていいか？」

「ああ」

真実をその口から聞きたいと、オレはヤツにたずねる。青臭い匂いが、風にのって鼻腔をくすぐった。

「何故、オレを再生した、オレだとわかっていて再生したのか？」

「回収した時は知らなかった。その後だ、知ったのは」

「オレがどんなヤツかわかっていたのに？」

「ああ、興味があつた・・・それだな」

興味だけで、再生したとは可笑しな男だ。

呆れた返答に、オレは顔を青空に戻した。

こうやって、ハマクラとキチンと話するのは初めてだ。

普段は目も合わせることなく、ヤツの存在を無視していた。

こうして話しているのは、ヤツを許したわけではない・・・知りたかつたからだ。

この身体の意味を。

「興味ねえ・・・この身体は何故だ？」

「何故といわれても、私にも不可解」

不可解で片付けられるほど、この身体を簡単には受け入れられない。どう間違えたら、こんな・・・オレを心底憎んでいた母親と同じに。

「無責任だな。オレはメタル以前も男の身体を持っていたのに」
「データを解析したが、致命的なミスは見つからなかったんだ」
「それで、その見解は？」
「あくまでも仮定だが・・・メタル以前のキミの身体が借り物だとしたら？」
「はあ？」

オレはとっぴなハマクラの発言に、身を起してヤツの顔を見た。

「借り物って、どういう意味だ」

足元の芝を指でいじりながら、ハマクラは続けた。

「キミは幼少の頃に保護されている、そして政府機関で秘密裏に育てられた。

その間に何かしらの処理を、身体に施されているのも考えられるってことさ」

「無きにしも非ずだな」

「物分かりがいいんだな」

「オマエがオレの母親にした仕打ちに比べたら、大した事は無い」

今度はハマクラがオレを見つめる番だった。

「オレがした仕打ち？」

「実験とでもいうべきかな？」

「何のことだ」

眉間にシワを寄せ、難しい顔をしながら、ハマクラは呻いた。
オレは努めて何気ない振りをして言った。

「オマエは、ボニーの子宮の中に时限装置を埋め込んだんだろ？」
「私は・・・知らないぞ」

オレが手に入れたオレ自身の情報は、どんな情報よりも確実なものだ。

機密屋として偶然出くわした事実だが、その事実がオレを「」へと駆り立てた。

「嘘をつくな、今更、隠してもしかたないだろ」

「だから、何の話だ？」

「オマエは、ボニーの腹の中にオレを仕込んだ。3年後に受胎するようにつてな」

「わからん」

「オレの母親は、汚れないまま身籠って、オレを産んだ」

見開かれたその瞳には驚愕がまざまざと浮かんでいた・・・どういうことか？

と聞きたいのはオレの方なのに、ハマクラがその言葉を口にしていった。

「どういうことだ？」

「知らん。知っているのは、母親が処女のままだったという事実」

母親が忌み嫌ったのは、己の腹より生まれ出た
見ず知らずの・・・身に覚えの無い・・・呪われた悪魔の子。

「ありえない、私は・・・頼まれた通りに彼女を再生しただけだ」
「嘘なら、オレはオマエを殺すぞ」

「誓ってもいい、そんな馬鹿げたことをする理由も無い」

「既に母親はオレを身籠っていたのか？」

「それに気付かない訳がないだろう」

お互いに解せない顔をつき合わせ、その事實は迷走し始めた。

正直、オレはこいつの技術には、以前より敬服していた。

人智を超えたものすら感じているのに、この不快感がハマクラを信頼できない理由になっている。

「もう一度、最初からみてみよう」

「ヤルなら、メイに気付かれないうちにやれ」

「どうということだ？」

不快感をあらわにして、ハマクラはたずねる。

「そういうことだ」

「ありえない・・・それは、ありえない」

「断言できるのか？完璧なものなど存在しない」

「まさか」

「オレに関わる遺伝子情報をもう一度、全部自分1人で調べるんだな」

その結果次第では・・・オレはメイをぶつ殺す」

オレとハマクラの間を・・・

一陣の風が、あの家へ目指して吹き抜けていった。

beat 14

その夜遅く、ハマクラは1人で出掛けた
過去のバックアップのデータをごっそりとカバンに抱えて。

AIに気取られぬように、こっそりと。

「そんなデータはアテにならない」と主張しても、ヤツは頭を振った。

どこまでも、御目出度いヤツだ。

メイは、とりわけハマクラの行動を疑うことなく、愛想良く送り出した。

彼の行き先をモニターしている筈。

「キタムラのところへ」とだけ、メイに告げ出掛けて行った。

残されたオレがすること・・・は、何も無い筈だが・・・

スプリングのイカれたソファーに横になって、古い映画をボンヤリと見ていると

例の発光体がそろりと傍に近寄ってきて、ハマクラの座る場所へと降りた。

ゆっくりと優しく点滅しながら。

「マサカド、お腹は空かないの?」

「空かない」

「喉は渴いていない?」

「大丈夫」

まるで、女のような物腰で言う。

「何か用?」

「とりわけ用事はないけれど、一緒に映画を観ようと思って」
「キミはこの映画のストーリーも、結末もわかっているんだろ？」
「ええ」

彼女、メイのその音声は、今も昔も変わらないのだろう。

こうやってオレと同じようにハマクラが映画を観ている傍で、彼女もゆったりと座って同じように映画を観ていたのだろうか。

「明日は、お風呂に入ってね。ずっと入っていないでしょ？キレイな髪の毛がベトついてる」

「ああ、気が向いたら」

「絶対、入って下さい」

「ＪＪに風呂に入る習慣はない」

「今は、血の通った人間でしょ。皮膚の脂が酸化して匂います」

「ハイハイ、わかりました」

今度は、まるで母親のような言い草だ。

そんなメイを見つめ、オレは苦笑した。

そのうち、色々和小言を聞かされるハメになりそうだ。

「なぜ、追われていたの？」

「キミは、何でも知っているはずだろ？」

「私が知っているのはデータ上のことだけです、真実は知りません」

なるほどね・・・思考というよりも、蓄積されたデータの解析か。
しかし、この反応の良さは・・・それだけでは無いはず。

「酒、ある？」

「あなたの身体は、アルコールに適していません」

「その辺は上手く作ってくれないと困るなあ、オレは酒好きなんだ」

から」

「JJのアナタがアルコールで酩酊するはありますがありません」

「気分だよ、気分」

酒も口に出来ないとは、不便すぎる。

「JJでも、酒の味は脳みそに伝わるのに。」

力もなく、疲れやすい身体・・・母親に酷似した容姿・・・気が滅入る。

「その代わり、ホットチョコレートはいかがですか？」

「何でもいいよ、持ってきて」

「キッチンにご用意できました、取りに行ってください」

「持ってきてよ」

「私はそこまで出来ませんから、ご自分で」

まったく、自分で勧めておきながら・・・人使いの荒いAIだ。

渋々と立ち上がって、キッチンのフードレンジの中で湯気を立ち昇らせた

カップを手に持った。夜気に包まれたキッチンの窓から、月が見える。

二つ並んで、中むつまじく、冷ややかな光りを降り注いで。

香ばしく甘い香りにそそられて、そつとカップに口をつける。

美味しい・・・久しぶりに舌の上に感じる甘味に身震いした。ふっと力が甦ってくるような錯覚。

「美味しいですか？」

「とても美味しい」

素直に「美味しい」と、気持ちいを口にした自分に驚く。

「アナタの味覚に合わせて作りました」

「ありがとう、ずいぶんとオレの味覚は様変わりしたようだ」

「味蕾の発達に努めます」

フーフーとカップを冷ましながら、ソファーに身体を埋め

ぼんやりと、口の中の甘味を噛みしめていた。

イスの上でユラユラと揺らめくメイを見る・・・

「オレが追われていた理由は・・・意図的ではないにしろ・・・

結果的に大勢の人間が犠牲になったからだ。子供から年寄りまで。

オレの不注意から多くの人間が死んだ・・・その責任は、そのままオレにある。」

「不注意？」

「ああ、依頼された仕事以上の事をしてしまったんだ。ようは、オレの気まぐれ

とでもいうのかな・・・1人を助ける為に、多くを犠牲にってしまったんだ。」

己のしでかした致命的なミスを、死をもって償おうと考えていたのに・・・

愚かにもこうして生身の人間として甦ってしまったのは、神の与える罰なのか？

それとも、オレに与えられた新たなチャンスなのか・・・神は気まぐれだ・・・

そつと舌の上を流れていく、甘いチョコレート。

生きる為の、生命を繋ぐ糧。

食べるという行為と、食欲を忘れていたオレは、ひどく損をしていたように思えた。

「本当に、美味しい」

「飲みたい時は言ってくださいね、いつでもご用意しますから」

メイはそう言って、うつとりするほど美しく発光して見せた。

夜通し車を走らせて向かった先、メイにモニターリングされていることは

承知の上、真っ直ぐにキタムラの自宅へと急ぐ。

ハマクラは、ハンドルを握りながら旧友に連絡をした。

「どうした？」

「調べたい事がある、お前の家を使わせてもらえないか？」

「構わんが・・・今、どこだ？」

「あと30分ほどで到着する」

「わかった、待っていよう」

ヤツの家に入ってしまったえば、メイとの通信は隔絶される。

それも狙いだ。

キタムラの強固なセキュリーをくぐる事はメイにも困難。

いや、そんな勝手な事をするほど愚かなAIではないはず。

マサカドの言葉の意味を考えながら、久しく口にしなかったタバコをくわえる。

カチリと開いた古びたライターの蓋の音が懐かしく聞こえる。

二つの月が見下ろす路は、文明と離れた辺境の地の風景とは変わって閑静な住宅地を走り抜けていた。

キタムラの家は、その先の岬の突端にあった。

「すまないな、遅くに」

「いや、直に来ると思っていた」

そう言ってニヤリと笑うと、キタムラは快く彼を家の中へ招き入れ

た。

窓から入る海からの心地よい風に吹かれながら、二人の旧友は久しぶりの再会に喜んだ。

連絡はとっていたものの、こうして顔を突き合わせるのは何年ぶりか。貫禄を増したその風体に、ハマクラは笑いながらキタムラの腹をつつく。

「お前は相変わらずだな、ちっとも変わらん」

「いいモノを食ってないからね」

「ジェイスの事は、すまなかった」

「いや、お互い様だ・・・逆にジェイスには申し訳なく思っている」

「少しばかり、冷静さを失ってるんだ」

「ああ、聞いたよ・・・仕方なかるう」

差し出されたグラスを受け取りながら、鞆に視線を落とす。

マサカドの言ったとおり、メイから抽出したデータは無用の長物かもしれない。

キタムラの書斎に朝日が差し込む・・・彼は、その眩しさに目を細めた。

「完璧に再生したのか？」

「ああ、したんだが・・・問題が・・・」

「問題？」

「まあ、これを見てくれ」

彼が鞆に手を掛けると、

キタムラは、書斎の奥のドアをアゴで指して彼を促した。それに従って、その小部屋へ。

「好きに使ってくれ・・・ただし、不正アクセスは困る」

「ああ」

「IDとパスはコレだ」

「いいのか？」

「構わん、お前に知れても痒くも無い」

ハマクラは恐縮しながら、持参したデータを挿入した。

壁一面のスクリーンに瞬時に映し出されたマサカドの再生体。

「これは・・・」

「マサカドの母親の酷似している」

「いじったのか？」

「いや、いつも通りに」

「考えられるのは3つ。一つは解析不良、もう一つはJJ以前にお前等が何らかの処理を施したのか、そして残る一つは・・・」

「メイの暴走」

表情一つ変えずに、その言葉を口にしたキタムラを、彼は黙って見つめた。

「断言できる事は一つ。我々はマサカドの身体を何一つ、いじってはいない。」

信じられるか？ヤツは生まれ出た瞬間に、持てる能力を全て開花させていたんだ。

保護する事は保護したが、我々が出来た事といえば衣食住を提供したくらいだ。

ヤツは、あの優れた脳みそを持て余しながら、自分の肉体が成長するのを待っていたんだ。

オレも・・・アレの開発が、極秘に行われていたのは知っている。オマエがその開発責任者だったことも、アレが誰であるかということこ

ともな。

開発は資金不足で頓挫したが、その成果を政府はもちろん誰もが認めている。

アレが無かったら、オマエのいまの再生技術を確立出来なかったのだからな。

オレの推測だが・・・メイの記憶が、いや、強い思念のようなものがその中に残っていたのではないか？それがマサカドに託された定め、ヤツがこの世に生を受けた理由なのではないのかとね」

「オマエもそう思うか」

「でないと、今回の説明がつかん気がするんだ」

ハマクラは大きくため息をついて、最悪の事態が起こったことに困惑した。

完璧とされていたメイのコントロールも、その内部には及んでいなかったのか？

「完璧などありえない」マサカドは言う。

確かに・・・しかし、これまで・・・いいや、そんな考えは捨てよう。

一からつき合わせていくしかあるまい。

まずは、ボニーを再生したデータから順に。

「悪いが、ココをしばらく借りるぞ」

「ああ、事の発端の責任はオレにもあるんだから」

と、キタムラは年月の流れたその顔の上に憂いを落とす。

長時間運転してきて、身体がガチガチに固く疲れ切っていたが頭はいつも以上に冴えきっている。

「オレは後悔してはいない」

ハマクラは首を横に振って微笑んで見せた。

b e a t 1 5 (後書き)

1 部 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2390a/>

beat

2010年11月27日05時53分発行